

発達

Quarterly Magazine

145
2016
WINTER

Vol.37

発行

2016/1/25
(毎年4回発行)

発行所：ミネルヴァ書房
発行人：杉田啓三

ISSN 0388-3787

H A T T A T S U

【特集】

子どものトラウマのケアとレジリエンス

- **トラウマとこころのケア**—— 友田明美/滝口慎一郎/青木 豊/青木紀久代/増沢 高野坂祐子/亀岡智美
- **子どものレジリエンス**—— 近藤 卓/高橋聡美/青木亜里
- **震災を生きる子ども**—— 本郷一夫/上山真知子/小林正幸/関口はつ江/田中三保子
前田正治/榎屋二郎/植田由紀子/内山登紀夫



Ⅲ 震災を生きる子ども

放射能災害下における子どもの変化と 保育者の支援

東京福祉大学教授

道灌山学園保育福祉専門学校非常勤講師

関口はつ江
田中三保子

保育はどのような状況にあっても子どもの日々の生活を充実させ、その子にとって価値あるものとしていく営みです。自然環境汚染という子どもの健全な生活が脅かされる危機にさらされながら、保育者はどのように子どもの活動を支えたか、子どもたちにもどのような変化が起きたのか、以下の保育者（幼稚園）の記録が端的に示しています。ここからは震災後の様子を、泥だんご作りを通じて考察し、さらに保育者の語りをみていきます。これらの経過から、子どもが安定して活動に集中し、自ら力をつけていくためには、保育者の個々の活動への細かい配慮とともに、子どもが相互に支え合う関係、共有された活動の展開が重要であることが分かります。

ます。これは災害という特殊な場合にとどまらず、時代の進行とともに起こっている子どもの生活が分断化されていくことの問題として受け止めたいと思います。

1 A子の泥だんごが教えてくれたもの

1 環境の変化と子どもの活動の実態

二〇一一年三月一日、東日本大震災、それに伴う原発事故により翌日より休園。四月からは放射能の影響により戸外には出られない。一年三カ月後（二〇一二年七月）、保護者の同意を

得て戸外での遊びを三〇分間のみ実施しました。二〇一四年四月からは一時間程度戸外で遊べるようになる。ただし、砂や動植物には極力触らないことが条件。二〇一五年五月からは、数回の表土除去などにより、空間放射線量も〇・一 μ Sv/h程度に改善してきたので砂場の砂を入れ替えて砂遊びを再開。プールなどの水遊びも七月からを予定していたが天候不順により実際は九月開始となりました。

① 園児の初めての砂遊び

A子は二〇一三年四月に年中組（四歳）に入園したが、二〇一四年五月から再開した砂遊びは誰一人園での砂遊びの経験者がいませんでした。園庭に大量の砂を準備し遊びの時間を作りましたが、震災前の子どもたちと明らかに違った姿が見られました。砂山を見ても興味を示さない（以前は一目散に砂山の頂上に登る等、嬉々とした姿があった）。遊び方が慎重でぎこちない。スコップ等の用具が上手く使えない。砂を固められない。手足が汚れることを嫌がる。拳句の果ては、新任の保育者も砂遊びの指導法が分からないこととなりました。五歳児たちが誇らしげに自信に満ちて作っていた「光る泥だんご」は、園の中では存在すら過去のものとなったのかと思えました。この時これまでのよ

表1 砂遊びの過程

<p>〈砂遊び開始〉 戸外での活動時間を60分と制限していた中での園庭での遊びになるので、時間配分を考慮して計画。</p> <p>【1日目】 年長のみ裸足になり一緒に砂遊びをする（砂遊び30分、片付け他30分）。砂の感触を味わえるようにするため、スコップ等の用具は少なめに用意。遊んだ後は手足が洗えるようにタライやタオル、シャワー等準備した。</p> <p>【2日目】 学年毎に時間を決め、混雑しないよう遊べるようにした（30分。時間配分を考慮）。用具の使い方や遊び方を指導する。水が使えるよう、バケツやタライに水を汲んでおいた。</p> <p>【3日目】 昨日に引き続き学年毎に砂遊びは30分と時間を決め行う。砂の扱い方や遊び方を伝える。保育者が楽しんで活動する姿を見せる。用具を種類別に片付けられるよう表記したかごを準備した。</p> <p>【2週間目】 戸外へは学年毎に決めて出る。砂遊びの仕方が分かってきたので、戸外活動1時間の中でそれぞれ好きな遊びが楽しめるようにした。</p> <p>【3週間目】 砂遊びでは山作り、川作り、だんご作りなど翌日へつなげられるよう、作ったものは保存できるようにした。砂遊びでもグループで活動する姿が見られるようになってきたので、他のクラスとの交流ができるよう、保育者が声をかけるなど遊びの橋渡しをした。以上、初めての砂遊びを援助するために、砂とのかかわりに慣れるまでの間、意識的に環境を制限してきたが、おおよそ1カ月位で時間や遊ぶ学年などの制限を外すことができた。</p>



図1 泥だんご作り



図2 黒く光り出しただんご

うな外での遊びを取り戻すのに時間がかかることを覚悟しました。

そうした中、砂遊びを再開するのですが、その過程を確認した後（表1）、A子の砂遊びの様子を具体的にみていきます。

② A子（五歳児年長）の砂遊び
「本当に触っていいの？」（五月）

五月からスタートした砂遊び、家庭で経験している子も少なく、初めて砂に触れる子もいた。A子も「本当に触っていいの？」と尋ねながらの砂遊びのスタートとなった。保育者たちは山

作り・川作り・穴掘り・型抜き・だんご作り等とに様々な遊び方を楽しんで見せた。A子も砂でいろいろな遊びをしていくが、その中でも特に泥だんご作りに興味をもって遊んでいた（図1）。

◎ どうして泥だんごだったのか？ ↓お絵描きや製作・粘土等一人で黙々と行う遊びが得意だった。水加減や力加減が上手くいかず、すぐに形が崩れてしまいA子と一緒にだんご作りをしていた友だちも、他の遊びへと移行してしまっていた。しかし、A子はだんごが壊れても、何度も挑戦し根気強く作り続ける。

◎ どうして泥だんご作りを続けていったのか？ ↓友だちとのかかわりの中では、自己主張が強く意見のすれ違い等で遊びから抜けてしまふことが多かった。しかし、得意なことや興味のあることには一人でも集中して取り組むことができた。

「固いだんごができたよ！」（七月）

何度も泥だんごを丸めることで、丁度良い水加減が分かるようになった。泥だんごが崩れないような握り方のコツをつかみ、固くて形の良いものが作れるようになった。

「ここの砂の方がいいよ!!」（九月）

水の含んだ泥だけでは、壊れやすいことに気づき、あたたかい砂や乾いた砂等いろいろな種類の砂をかけて握ってみる。

◎ どうして砂をかけてみたのか？ ↓山作りをしていた子どもたちが、濡れた砂や乾いた砂をかけ高くしていく様子を見てヒントを得、だんご作りに応用したのだ。小石の混ざった粒子の粗い砂では、表面がざらついてしまうので、自分でザルを使ってさらさらの砂を作りかけていた。砂場だけでなく、園庭の様々な場所へ移動し、さらにきめの細かい白砂を求めて取り組んでいた。さらさらの砂を探している友だちには「ここの砂の方がいいよ!!」と教えていた。逆に形の良いだんごを作った友だちには「どこの砂をかけたの？」と尋ねる姿も見られた。

◎ どうして人と反発することの多いA子がぶつからずに伝え合えたのか？ ↓さらさらの砂の場所の情報を共有することで、さらに良いだんご作りができることに気づいた。

表2 2年前の「泥だんご」作りの記録

<p>【年少児の姿】 5月頃：大きさにこだわり「一番大きいやつ作って」と保育者に要求する。作ってもらっただけで満足する。6月頃：自分の手に収まる大きさの泥だんごが扱いやすいことに気づく。7月頃～9月：年長児から白砂をかけると固くなることを教えてもらう。根気強くだんご作りに取り組みことで表面に変化が見られることに気づく。</p> <p>【年中児の姿】 4月：自分で作れるようになった自信と作ったものを誰かに見せたいと思う気持ちが出てきた。5月～7月：友だちといかに大きく作るか、競い合うことから、光らせることに目標が移った。夏休み明け～：泥だんご作りが、翌日まで引き続き行うようになり活動が継続していくようになった。</p> <p>【年長児の姿】 6月：昨年の経験から固いだんごが作れるようになる。ザルに白砂を入れ、細かくさらさらの砂を作り、光る泥だんごを目指す。「こんな風に作りたい」と自分のイメージをもち、数日間かけて取り組む。泥だんごが光るよう工夫をして布で磨いたり乾かないようにラップをしたりして、試行錯誤しながら自分で経験していった。</p>
--

「すごい！ A子ちゃんのだんごが光ってる!!」
(一〇月～一月)

白砂をかけて形を整えているうちに、表面が黒く光り出すことが分かり、手のひらや指を使って擦り始める。

◎ どうして黒く光り出したのか？ ↓油・紙・土粘土製作の際、少しのひびや型崩れに気づき、指で擦ったり、手のひらで形を整えたりした。その経験を活かしたことで、だんごが光り始めた(図2)。だんごが光ることが面白くなり磨き始め、時間をかけて仕上げていた。友だちや保育者から「すごい！ A子ちゃんのだんごが光ってる!!」と褒められ憧れをもたれていた。友だちも、A子と同じようのだんごを作

ろうと、磨く様子を見たり、やり方を聞いたりして模倣し始めた。自ら年中・年少児にもだんごの作り方を教えたり、さらさらの砂の場所を教えたりし、意欲的に友だちとかわって活動することができた。

◎ どうして自分からだんご作りを教えることができたのか？ ↓友だちや保育者に認められ泥だんごをきれいに光らせたことで、自信が付き、他へ働きかける能力が培われてきた。また、だんご作りにじっくりと取り組むことで気持ち満たされ落ち着き、人と穏やかに接することができるようになった。

③ 「泥だんご」の復活

A子の五月からの泥だんご作りは保育者の予想を超えて「ピカピカの泥だんご」を完成させました。「泥だんご」作りという、従来、園内で年長者から年少者へと受け継がれてきたものを、砂遊びをしていない三年間のブランクを経て復活するには、相当に保育者の力が必要と考えていました。ところが、A子は保育者の指導があつたにせよ、「光る泥だんご」にたどり着き、子どものもっている計り知れない能力に改めて驚かされました。しかし、「震災前の泥だんご作りと何が違う」との思いが拭えない部分もありました。そこで二年前の活動記録と

比較してみたいと思います(表2)。

(川上むつみ・根本頼子 郡山市大槻中央幼稚園)

2 「泥だんご」作りの今昔(比較)から

前の子どもたちとA子たちの「泥だんご」作りの違いについて保育者は次のように指摘しています。「震災前は、年少・年中・年長と泥だんご作りがつながる過程があり、子どもが成長するに従い、思考の変化や想像の広がり、交流の幅が出て、技の伝承がある。競い合い、挑戦し合い、頼る頼られる関係、挫折やあきらめない気持ちなどの感情の体験が重なって自信に結びつき、集団全体として力強さを感じていた。

震災後、一時途絶えた泥団子作りが泥団子のみならず砂遊びの経験知の乏しい子どもによって開始されたが、そこでは自分の興味への集中が精一杯で、興味を失うと離れやすい。目に見えない支え合い、活動定着の基盤が弱い」と。この事実からも、単に同じ活動が行われればよいのではなく、子どもの内面を作るのは活動時の状態であり、特に人と人のつながりが強調されます。震災後五年目を迎えた今、保育者は経験の不足に注目するのではなく、子ども個々の能力を見極めながら、子どもたち自身で生活を作り上げるといふ基本を堅持した保育に向き合っ

ています。

(関口はつ江)

2

保育者の語りにも 子どもの変化と保育の支援

保育は、A子の事例に見るように、保育者が子どもの思いや考えに寄り添いながら、子どもたちとともに日々の生活を作っていく営みです。子どもの主体性を尊重しつつ、教育的配慮に基づき支援が求められます。

ここでは原発事故後数年間の保育現場の軌跡を辿り、保育における支援のありようについて考えます。語りによる保育の振り返り記録を元に、保育者から見た子どもや保育者の意識の変化についてみていきます。

1 災害後一年目の保育

災害直後の二〇一一年度当初から、子どもたちは戸外に出られなくなりました。三歳児は園での戸外活動未経験のためか、幼稚園はそのようなところと漫然と受けとめているようで、室内にいて保育者の指示に合わせて動き、以前のように我を出さず聞き分けがよくなりました。四歳児は前年に外遊びの経験があり、外に出てはいけなさと分かっているにもかかわらず出てしまっ

たり、室内にとどまることが受け入れられないのか落ち着かなかつたりして、そこには閉じ込められたくない気分が感じられました。五歳児は外に出てはいけなさとその理由は理解しているのに、窓にへばりついて外を眺めていたり、「外に出てはいけなよね」と確かめながら遊んでいたりと、室内遊びをしていても遊びが深まらず、でも外に出たいとは言わずに過ごしていました。

保育者にとっても、長期的に、室内空間の中でだけで日々の生活を続けていくのは初めての体験です。子どもたちの示す変化を受けとめても、どう支援すればよいかが見えてくるわけではありません。外遊びができないことに大きなプレッシャーを感じて、子どもたちの主体的な遊びを盛り上げたい思いと同じくらいに「これをさせなくては」との思いも強くなりました。時に保育者が先走りがちになり、子どもはそれに没入できずに飽きたり離れたりして、自分の遊びとして捉えきれなくなりました。また、「わらわらとしてしている子どもたちを、あえてまとめるのがいいのか、好きなことをやらせるのがいいのか分からない」「熱中せず何となくがやがやしているのは災害の影響なのだろうか」などと思いを悩む姿も見られました。

外に出られずにいる子どもの姿からそれぞれの思いを汲み取り、少しでも充実した生活が送れるよう懸命に支援を模索する保育者の姿が読み取れます。保育者自身もまだ混乱の中にあり、支援が空回りしている様子もうかがえます。

2 二〇一三年目の保育

二〇一二年度には三〇分程度の外遊びが解禁されましたが、保育はまだ屋内活動が中心でした。一年目の経験を踏まえて、保育者は運動遊びや室内遊びをさらに工夫し外遊び不足を補う努力をしました。子どもたちは状況が限られた中で、やりそうになかったことに手を出さずかけを与えられ、外遊びがあればいいであろう室内遊びを器用にこなしたり、五歳児ではアイデアが出ると設計図や型紙でパーツも作り、二週間かけてバイク作りをしたりと、室内遊びが充実しました。保育者が一人ひとりに配慮しやすくなりましたが、子どもはいつも誰かに見られている環境に置かれ、常に保育者の目を意識せざるを得なくなりました。保育者は見えないながらも見ないようにしました。子ども同士の距離が近づき仲間意識が強くなった反面、三歳児では他の遊びが目に入って自分の遊びに集中できず、落ち着かなくなりました。

どもたちは心を揺さぶられたのだと思います。

3 四年目の保育

二〇一三年度には一時間ほど外に出られるようになりました。子どもたちは遊びの選択肢が増えてあっちこちやりたくなり、保育者も一つの遊びに集中してほしいと願いつつも、今は外に行かれるのだから外で遊ばせてあげたいと思います。外で砂場や泥団子作りに没頭する体験ができなかった子どもたちに、何とか達成感を味わわせてあげたいと願います。けれども、外遊びを経験できなかった子どもたちは、以前の子たちのようにはすぐに外で夢中になって遊ぶことは難しいのです。ある保育者からは「いざ外に出たときに子どもたちにのぼる体験が足りなかった。ここまでやるべきかとは思ったが、自分が裸足になって登り棒にガーツとのぼって見せて子どもを引きつけた。そのぐらいやらないとずっとやれないだろうと。子どもたちからワーツと声が上がって、その後挑戦する子どもが出てきた」との述懐がありました。室内で運動不足を補う遊びは工夫してきましたが、何かにのぼる体験はさせられなかったことが気になつていたので。初めて外に出たものの戸外での遊びに戸惑う子どもたちを前にして、保育者は「こんな面白い遊びがあるよ」と好奇心を呼び覚ましたかかったのでしょうか。咄嗟に身をもつて示す行動に出ました。その行動と心意気に子

二〇一四年度には外遊び制限が解除され、外見上は以前と同じような保育ができるようになりました。しかし、この年の園児は災害時〇・一・二歳であり、生まれた直後や短期間後から災害の影響下にありました。汚染は目に見えず、子どもは自身で安全を判断する術をもてず、体験を重ねながら外界を知り自分なりの行動基準を作っていくことができなかつたのです。一つひとつの判断をいちいち大人に委ねていくしかありませんでした。三歳児は室内遊びが上手ですが、身の回りのことを自分からやろうとしない子が目立ちます。五歳児には前のように外遊びに興味に向かない様子が見てとれます。遊びが伝承されなかつたので遊び方が分からない子や、できるかどうかを気にして、できないと諦める子もいるようです。四歳児も聞き分けがよく、片づけはいやという子がいなくなり、遊びの指示を待ったりします。保育者が「こういう遊び方も知らない」と思うほど子どもたちは外遊びの経験が少なく、自分から遊びを作り出す意欲も体験も弱いです。その中で子どもたちが「ごちそう作るからカップちょうだい」と保育

者に言いに来て、それまでは保育者の方からカップを持っていったのが、自分たちで遊びを見つけられるようになった様子も見えます。「心が動いてこうしたいという四歳児の遊びは底辺にあるから、今、いい経験をさせてあげたい」という保育者の言葉には、子どもたちの現状を評価し嘆くのではなく、子どもたちの「いま、ここ」に寄り添い、「ここ」を基点に保育を少しでも前に進めていこうとする保育者の気が感じられます。

保育における支援とは、子どもが知識や技能を身につけられるようにと支えることだけではありません。それよりも、目の前の子どもたちの状態を的確に捉え、大きな視野で子どもたちを見守り、一人ひとりが充実する道を探りながら、機を捉えて、子どもが自分で歩いていかれるよう支えていくのだと思います。(田中三保子)

せきぐち はじめ

1937年生まれ。東京福祉大学社会学部社会学部教授。「保育の基礎を培う『保育原理』(編著、明文書林)、『実践理解のための保育内容総論』(共編著、大学図書出版)。

たなか みほこ

1946年生まれ。道灌山学園保育福祉専門学校非常勤講師。「保育の基礎を培う『保育原理』(共著、明文書林)。